【第16回埼玉大会予稿】

新聞『月刊太湖』にみる西川吉之助

辻　　久　孝
日本聾史学会・一般社団法人滋賀県ろうあ協会

あらまし： 西川吉之助（にしかわ　よしのすけ　1874-1940）は、昭和初期に手話教育を排除した口話主義教育を推進した教育者の一人といわれる。本稿では、新聞「月刊太湖」を収集調査したことにより、西川吉之助が近江商人としていかに活躍してきたかについて、また晩年の西川吉之助の人物像も明らかにしたものである。

キーワード：月刊太湖　近江商人　転居　遺言

1．はじめに

本稿は、新聞「月刊太湖」に掲載された西川吉之助に関する記事の中からいくつか紹介し、西川吉之助の行動記録を明確にしていくことを目的とする。口話主義教育者としての活躍を知らされているが、近江商人に関する諸資料の中には近江商人としての西川吉之助について掲載するものが見当たらない。そのために、近江商人としていかに活躍してきたかはわからないままになってきた。

しかし、山田・西川・藤本の先行研究[※1]によって近江商人としての西川吉之助について論じていると知り、さらに参考文献をみて新聞「月刊太湖」の存在を知ったのである。「月刊太湖」は、西川吉之助を研究する上で重要な史料の一つといえよう。

辻 久孝(2008年発表)[※2]・立入 哉(2010年発表）[※3]で考察が十分至らなかった点についても、「月刊太湖」の研究によって明らかにする。

2．新聞「月刊太湖」

新聞「月刊太湖」は、1926（大正15）年から1940（昭和15）年まで、毎月９日に178回[※4]発行した月刊新聞である。その頒布先は全国の滋賀県人諸氏、県下知名の士、東京商大如水会の会員等である。いわゆる「近江商人の月刊新聞」といえよう。最終回の第３号（1940（昭和15）年11月９日発行）の「回顧十五年　近松文三郎（ちかまつ ぶんさぶろう 1868―1942)」によると、「本誌創刊の主因は八幡町史編纂に対する資料を求めることにあった」とある。主宰は西川傳右衛門家の支配人でもある近松文三郎であり、本紙には西川吉之助、長女の西川昌子、そして徳川義親からも寄稿したものであった。

近松文三郎の略歴については、「『月刊太湖』の創刊者、商人・郷土史家。大津に生まれる。幼時に高田義甫（たかだよしなみ）に養育され、のちその長女と結婚。大津の「九皋義塾（きゅうこうぎ

じゅく)」や黒田麹廬（くろだ きくろ）に学んで、漢学および数学を修めた。また近江八幡の西川貞二郎（にしかわ ていじろう）らの後援を受けて、東京高等商業学校（現、一橋大学）にも学んだ。卒業後西川貞二郎家の支配人となり、北海道漁業の開拓や農業経営などにあたった。著書に『西川貞二郎伝』、『高田義甫伝』などがある」[※5]とある。

3．西川吉之助の行動記録

3-1．近江商人としての西川吉之助

西川吉之助が近江商人としていかに活躍してきたかについて、次の題で記しているものである。

第12号（昭和２年１月９日発行）
「西川吉之助氏の知利行を送る　西川吉之助」

この記事文の内容は、西川吉之助の自伝的小説のようなもので、明確には言えないが西川吉之助が辿った近江商人としての経歴といえよう。
この文を要約すると、以下のようである。

1）八幡商業を出て、越後のアメリカ石油会社に入った。相当の地位を与えられたに係わらず会社と運命を共にせず辞める。
2）横浜のドイツ商館に入った。
3）また外のドイツの店の鋼を売る店を東京で始めたが、長続きはしなかった。
4）アメリカへ渡る。
5）サンフランシスコで雑貨も売り、フレスコでは銀行に入ったり郵便局へ勤めたりした。
6）シアトル[※6]では野菜仲買をやったり日本天産物を輸入したり、日本商店の支配人を務めたりした。
7）ミカド貿易商会を創め、牡蠣の養殖輸入も計画してみた。コロンビアのロイヤル魚会社に連絡を取ったり日本手工品を高級広告用品としてアメリカ・カナダ両国に紹介したり、人の未だ始めぬ仕事も大分やったのであったが、大体自分の確固たる意志が欠けていた。

「月刊太湖」を通して、西川吉之助が近江商人として活躍したことは明確になったと考えられる。転職を何回もしたものの、国内の外資系会社に勤めたりアメリカへ渡り色々な商売をしたりしたことは、語学力を自然に身に付けたのではないかと考えられる。その後の聾教育、特に口話主義教育における相当の語学力の必要性につなげることも考えられる。

3-2．晩年の西川吉之助

「口話教育普及と発展のため家財蕩尽して、学校前の借家に転居した」年について、次の題で書いているもので、その文章によって明らかにする。

第148号（昭和13年５月９日発行）
「咿唔軒贅語（一）　孤筍生」

一昨年草津へ移居以来、身辺の雑事に混れて、本誌への寄稿も怠りがちなので、色々の苦情や注文を時々聞くので、これ幸ひと下らぬ事を又述べさせて貰ふ。

1936（昭和11）年に、草津にある聾話学校の校門前の借家に転居したこと

が明らかである。

「身辺の雑事に混れて」とあったが、西川自身病気がちになったこと、家族の不幸（長男の伝一の入院など）、口話主義教育へのつまずき等が重なったといえよう。

咿唔軒といふのは、今借りて居る家が誠に小さく、玄関の三畳が応接室であり、書斎でもあれば寝室でもある。江州辯でイゴケン即ち動けぬ程狭い。前に預かって居る学校があって、話せぬ筈の唖の子の読書の聲が聞えて来るので名をつけたのである。

徳川義親の晩年回顧によると、晩年の西川吉之助の生活は「赤貧、洗うが如し」であったとも語っている[※7]が、「咿唔軒贅語」はまさに「晩年の西川吉之助」の象徴であるといえよう。「孤筍生」とは西川吉之助のことである。

「咿唔軒贅語」原稿と共に、「遺言」を寄稿しているが、近松文三郎は、嫌になって没書し西川に没になったことを伝え、机の引出中にしまっておいた。しかし、２年後の1940（昭和15）年７月に西川の葬式も済んだ後に整理しているうちに偶然発見し、ようやく故人の投書の望みを挙げて掲載することになった。

第175号（昭和15年８月９日発行）
「故西川氏の寄稿中　遺言と題せるもの　近松生」

「遺言」について要約すると、以下のようである。

1）万事を簡単にして人手を煩わさずに迷惑を及ぼさないようにしたい。
2）私の骨を大谷にある累代我が家の墓に納めることが親戚によって許されたならば、そのところへ納めてもらいたい。
3）許されないならば、徳川義親候から学校にもらった肉桂の木の下に肥料として埋めてもらいたい。庭内への死骨穢れがイヤというならば、捨ててもらいたい。
4）仏式だった場合にもお通夜は止めてもらいたい。
5）新聞の広告について、近親で密葬が済んでしばらくしてから五号くらいの大きさでいつ死んだかということを簡単に知らせること。
6）万々一校葬の相談があっても断ってもらいたい。寿像建立の相談をしてお金まで集まったのをやっと断って学校の基金造成に使ってもらうことにまで漕ぎつけた位だから、私のためにお金を使ってもらうことが心苦しいから。

「遺言」では、借金や自分の葬式などについて述べているが、前から自分の死のことを考えていたようである。「2）私の骨を累代我が家の墓に」とあったが、結局、大谷にある累代西川家の墓に納めている。そういうことで、最後まで近江商人としての西川吉之助を見捨てなかったと考えられる。

５．結びにかえて

近江商人として活躍してきたこと、転居した年について、「月刊太湖」の研究

によって明らかにしたことが収穫になった。また、西川吉之助の人物像がわずかながら見えてきたように思えた。

しかし、「月刊太湖」には、西川吉之助の行動記録のみでなく、西川家のルーツや滋賀県立聾話学校のことも紹介している。北海道での近江商人の活躍も掲載してある。

研究課題としては、西川吉之助に関する記事を整理し図表化していくとともに、西川吉之助の生涯や教育観等についても明らかにしていきたいものである。

※１　山田　孝・西川健一・藤本文朗「西川吉之助の生涯と口話式聾教育運動」 障害者問題研究第22巻第４号　1995年

※２　辻 久孝「滋賀県立聾話学校校長　西川吉之助の生涯」 日本聾史学会報告書第７集 日本聾史学会　2009年　pp78-79

※３　立入 哉「西川吉之助：教育に目覚め、しかし、思い砕けた小樽時代」 日本聾史学会報告書第９集　日本聾史学会　2011年 pp62-65

※４　第１号（大正15年２月９日発行）～第175号（昭和15年８月９日発行）、第１号（昭和15年９月９日発行）～第３号（昭和15年11月９日発行）。

※５　「滋賀県百科事典」滋賀県百科事典刊行会／編 大和書房 1984年 p.484

※６　Seattle：アメリカ北西部にある都市。ワシントン州（州都：オリンピア）を含めた太平洋岸北西部地域の最大の都市であり、キング郡の郡庁所在地。

※７　杉田静山「西川はま子の歩んだ道」 日本聾史学会報告書第９集　日本聾史学会 2011年　pp48-52

参考文献

１、障害者問題研究　第２２巻第４号　1995年
２、月刊太湖　1926-1940年
３、日本聾史学会報告書第７集　日本聾史学会 2009年
４、日本聾史学会報告書第９集　日本聾史学会 2011年
５、滋賀県百科事典　滋賀県百科事典刊行会／編 大和書房 1984年